43　江戸時代における大坂の女医

鈴木　則子

奈良女子大学

江戸後期，相撲番付になぞらえた様々な番付表の出版が流行した．たとえば料理屋番付や全国の温泉地番付などがある．料理屋や温泉地の名を東西に分けて大関から小結まで格付けして列挙する．そういった番付の一つに医師の番付表もあって，京・大坂・江戸と，都市ごとに出版されている．大坂の医師番付で注目されるのは，人数は少ないながらも女医の名が見えることだ．

報告者はかつて「近世後期産科医療の展開と女性～賀川流産科をめぐって」（『アジア・ジェンダー文化学研究』1号，2017年）のなかで，女性の産科医・婦人科医の医学教育や堕胎行為について言及したことがある．その際に，今後の課題として，江戸時代の医療現場で働いた女性たちについて，産科・婦人科に限定せずにその実態を明らかにしていきたいと考えた．そこで今回の報告では，上記論文発表後に見いだした，大坂の医師番付に記載される女医の記録について紹介することを通じ，女性医療者の活動についてわかる範囲で考察を加えてみたい．

紹介する医師番付は，いずれも『大坂医師番付集成』（思文閣出版，1985年）に影印版で収められている．寛政から明治迄の大坂の医師番付45点の中で確認できる女医の初出史料は，弘化2年（1845）出版「当時流行町請医師名集大鑑」である．「老松」という町名とともに「〇　女　あだち」とある．「〇」はこの番付表の中で「本道」を意味する印で，女医「あだち」氏は内科医であったことがわかる．

7年後の「嘉永五年（1852）霜月新梓　浪花当時発行町請名医集」では，女医は4名に増える．すなわち「鍼　松江丁　うさぎ針」「諸病見立　老松丁　あだち」「按腹　塩心斎　玉野氏」「按腹　二ツ井戸一丁西　宮川京」である．4名列記したうえで「此先生方，何れも女医師名家なり」と添え書きがあり，全員が「女医師」であることを確認できる．

「うさぎ針」と呼ばれた小児鍼を得意としていることや，「按腹」という産婦への施術を標榜科としていることから，「女医師」の診療対象が主に子供と女性であったことがうかがわれる．また本道の「あだち」氏も含め，女医というカテゴリーで一括りに記載されているということは，女医であることが患者にとって重要な情報であったことを示唆する．鍼灸や按腹だけでなく内科の診療においても，女性患者にとって女医であることは魅力であったのだろう．

嘉永5年から16年後に板行された「慶応四年（1868）夏改正　当時発行名医鑑」においても松江丁の「うさぎ針」，「あだち氏」，「玉野氏」は継続して掲載される．彼女たちのこのような長期にわたる診療実績は，「女医師」たちの診療活動が大坂市中の人々に受容され，定着していたことを示している．近世大坂の医療環境は，女医の活動の歴史抜きには論じられないといってよいだろう．

ところが明治以降の番付からは女医という分類枠組みが消えるだけでなく，女医が活躍した「鍼」や「按腹」という診療科も見えなくなる．代わりに「漢法」「洋法」「整骨科」という新たな近代的診療科名で分類されて，女医の名前はなく，男性医師の名前のみが並ぶ．近代の医制の改変が，江戸時代までの女医の活動や社会的地位に大きな打撃を与えたのだと考えられる．